

## 酒井正文先生のご退職にあたって

法学部長 石上 泰州

酒井正文先生は、本学の初代学長をお務めになつた中村勝範先生の全幅のご信頼の下、本学の設置準備から立ち上げにいたるまで、その実務を万端、任されてこられました。本学の実質的なファウンダーとも申し上げるべき先生が、開学からおよそ四半世紀を経た今日、定めとは申せ、本学をご退職されることは、佐藤栄学園平成国際大学にとりまして、まさに支柱を失うがごときであります。

酒井先生は、昭和二四年九月に東京都でお生まれになり、慶應義塾大学法学部政治学科をご卒業の後、同大学の大学院法学研究科へと進まれました。大学、大学院の指導教授が、後に本学の初代学長となられる中村先生でいらつしやいました。中村先生のご指導の下で日本政治史を専攻された酒井先生は、昭和五三年に岐阜県の中部女子短期大学へ専任講師として招かれ、大学教員としての歩みを本格的にスタートされます。昭和六一年には、杏林大学が社会科学部を新設するにあたり、先生は、請われて招かれることとなり、後に教授にご就任されるなど、同大学の重責を担つてこられました。

こうしたなかで、当時、埼玉県内で中学校、高等学校、短期大学などを運営しておりました佐藤栄学園が、創設者佐藤栄太郎先生の念願であつた、四年制大学の設置に着手するにあたり、初代学長へのご就任が予定されておりました中村先生からの懇請により、酒井先生は本学に転じられることを決意されます。本学の設置準備から立ち上げにい

たる、先生のご活躍、ご苦勞等々については、同門で、当初からのメンバーでもある法学研究科長の浅野教授の献辞に詳しいかと存じますので、ここでは多弁を弄しませんが、酒井先生のご指導とご尽力なくして今日の本学が存在し得なかつたことは、衆目の一致するところであります。

酒井先生は、本学の教育・研究・運営の基礎づくりを一手に担われてこられ、そのご功績はまさに本学の全般にわたりますので、その中から何かを特記することはまことに難儀でございますが、ここでは、先生と本学の運動部との関わりについて触れさせていただきたく存じます。

佐藤栄学園は世界的なアスリートを多数輩出するほどにスポーツの盛んな学園であり、酒井先生は、その一員である本学の発展には運動部の活性化が不可欠であると考えておられました。有言実行、先生は、運動部を取り巻く諸々の環境整備にご注力されただけでなく、自ら率先して、運動部のご指導にあたってこられました。本学の陸上部が箱根駅伝に初出場した際の陸上部長は酒井先生でありました。箱根駅伝への出場を決する予選会において、見事、大願成就をはたし、部員たちがスーツ姿の先生を胸上げする歓喜の瞬間は、本学の草創期を象徴する、忘れ得ぬ場面でございます。

後に先生は、野球部の部長に任せられましたが、球場はもとより、遠く宮古島のキャンプ場へも度々足を運ばれ、部員を叱咤激励くださいました。先日は、野球部への多年にわたるご指導の感謝の印として、現役プロ野球選手であるOBの一人が駆け付け、同じ球団で活躍するOB数名とともにサインした帽子を先生にプレゼントするという一幕がございました。とても嬉しそうに、満面の笑みで着帽された先生のお姿を拝見し、先生が部員たちから深く慕われていたことに、あらためて感銘を受けましたが、同時に、先生が草創期から熱心に育成されてきた本学の運動部が、着実に実績をあげ、社会に大きな地歩を築きつつあることを強く印象付けられたところでもありました。

さて、先生の本学発展への直接的なご貢献ばかりを書き連ねてまいりましたが、先生の研究者としてのご功績にも触れぬわけにはまいりません。もともと、そのご功績は、日本の政治学者のほとんどが入会する日本政治学会において、長らく理事職をお務めになられた他、日本選挙学会や日本法政学会においても理事に推されるなど、多年にわたって日本の政治学、政治史学を牽引され、今なお学界の重鎮としてご活躍であることをご紹介すれば、十分ご理解いただけるかと存じます。先生が「平成国際大学法学部教授」として、政治学系の諸学会の中心でご活躍されていたことがそのものが、新設大学として評価の定まらぬところのあった本学の研究機関としての価値を、存分に高らしめてくださっていたのであり、今更ながらそのご功績に御礼を申し上げねばなりません。

私事ながら、中村先生の弟弟子を指導教授とする当職にとりましては、酒井先生は、学部生の時代から、母校のキャンパスやら学会やら研究会やらで、親しく接して下さる大先輩であり、私が縁あって本学に転じてからは、従前以上に公私にわたって近しく、深くお付き合いをさせていただいている大恩人であります。そのようなたちで多年にわたってお世話になっております身から申せば、酒井先生の大学人としての後半生は、平成国際大学の育成と発展にお捧げいただいたのだと申し上げても過言ではなく、あらためて深く謝意を表するばかりであります。これまでは、先生が残して下さっている遺産に甘えながら、また、ことあるごとに、先生の御助言や御教示をいただきながら、どうにかこうにか持ちこたえてまいりましたが、大学を取り巻く環境が益々厳しくなり、また、不確実性を増しているなかにあつて、先生のご退職はまさに痛恨の極みでございます。私ども後輩は、酒井先生が産み、育ててくださったこの大学を、次の世代、さらにその次の世代へと引き継ぎ、大きく発展させていくべく、尚一層の努力を傾けてまいる覚悟でございます。

酒井先生、これまで本当にありがとうございました。また、お疲れ様でございました。そして、誠に勝手ながら、これからもどうぞ本学へお力添えください。衷心よりの御礼と、今後も倍旧のご指導を賜りますことをお願い申し上げます。敬辞とさせていただきます。